

VI) 病害虫発生経過の概要及び発生原因の解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
イネ	いもち病	葉いもち 遅い、 穂いもち 平年並	やや少ない やや少ない	葉いもちの初発生は6月19日と遅く、全般発生も7月第1半旬とやや遅かった。例年感染が活発化する7月の発生量は、BLASTAMによる感染好適日が県内各地で出現したが、初期感染量が少なかったため、平年に比べてやや少なかった。穂いもちの初発は平年並みであったが、発生量は平年に比べてやや少なかった。	伝染源となる汚染種子の割合が少なかったことに加え、箱施薬剤が広域で施用されたことにより、葉いもちの発生が抑制され、この結果、穂いもちの感染もやや少なくなったものと考えられる。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じ薬剤散布が行われた。
	紋枯病	やや遅い	平年並	初発生は平年よりもやや遅く6月17日に認められた。その後の病勢進展は緩慢であったが、出穂期前後の7月下旬～8月上旬に急激に発病株率が増加した。8月中旬以降、病勢は再び停滞し、例年、上位進展が活発な早生種栽培圃場でも、止葉葉鞘にまで病斑形成が及んだ圃場はあまり認められなかった。主要品種コシヒカリを含む全般の発生量は平年並みとなった。	8月中旬以降、病勢進展が緩慢となったのは、気温低下が顕著で、感染に好適な日が続かなかったためと考えられる。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じ出穂期までに薬剤散布が行われた。
	縞葉枯病	早い	やや多い	6月9日にハナエチゼンで初発が確認された、この後、各地でゆうれい症状を呈する被害株が認められた。一部ではやや発病程度の高い圃場も確認され、平年に比べて全般の発生量はやや多くなったが、発生圃場率は1.7%で、22年ぶりに広域的な発生となった昨年の10%程度に留まった。	前年度、突発的な発生を招いたヒメトビウカ保毒虫が越冬し、本年度、伝搬活動を繰り返したため、平年に比べて発生がやや多くなったものと考えられる。	4月23日付けで注意報を発表し（保毒虫率及びヒメトビウカの生息密度の情報）注意を喚起した。前年度の縞葉枯病発生地域においては、箱施薬剤及び本田散布剤の施用により媒介虫のヒメトビウカに対する防除が精力的に行われた。
	ニカメイガ 第1世代 第2世代	— —	少ない やや少ない	予察灯及びフェロモントラップにおける誘殺数は極めて少なく、発蛾最盛期は判然としなかった。全般に圃場における被害は第1世代、第2世代ともに少なかったが、きぬむすめ栽培圃場の一部で食入被害が散見された。	近年、発生量は少なく、育苗箱施薬などの防除対策が行われたため、発生が抑えられたものと考えられる。	育苗箱施薬が行われた。
	セジロウシ	やや遅い	平年並	予察灯での初飛来は平年に比べてやや遅い6月下旬から認められ、6～7月の飛来量はほぼ平年並みであった。これに由来する幼虫は7月中旬から発生し、全般の発生量は平年並みであった。	7月下旬から8月上旬にかけて気温が低く経過し、次世代の圃場での発生はやや遅くなったものと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時に穂いもち・ウシカ類の同時防除が行われた。
	トビロウシ	やや遅い	平年並	予察灯での初飛来は平年に比べてやや遅い6月下旬から認められ、6～7月の飛来量はほぼ平年並みであった。これに由来する幼虫は7月下旬から発生し、全般の発生量は平年並みであった。8月中下旬の第2世代成虫密度はほぼ平年並みで経過し、コシヒカリでの坪枯れ被害の発生は少なかったが、9月下旬にきぬむすめで坪枯れ被害が発生した。	9月中旬から10月上旬にかけて気温が高く経過し、次世代の増殖に好適な状況が続いたため、きぬむすめで坪枯れ被害が発生した。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時に穂いもち・ウシカ類の同時防除が行われた。
	ヒメトビウシ	平年並	平年並	5～6月下旬の払い落とし調査では、虫数、発生圃場率ともに高く、この時期の発生量は平年に比べて多く経過した。	在来個体群に昨年の飛来個体群が加わり越冬量が増加したと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、昨年発生が多かった地域では6月下旬から本田防除が行われた。また出穂時にはいもち・ウシカ類の同時防除が行われた。
	ツマグロヨコバイ	やや遅い	平年並	第1世代成虫の発生時期は平年に比べてやや遅かった。払い落とし調査では全期間を通して虫数、圃場率ともほぼ平年並みで、吸汁害やすす病などの発生は少なかった。	昨秋の発生量が少なく、越冬量は少ないと推察された。6月からは気温が高く推移し増殖には好適であったが、初期発生量が少なかったため全般に平年並みの発生量で経過したと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時にはいもち・ウシカ類の同時防除が行われた。

	斑点米カメムシ類	平年並	平年並	畦畔雑草すくい取り（6月下旬：頭数0.9頭/10回振・発生圃場率25%、前年1.4頭・22%）、極早生品種出穂時（7月下旬：4.6頭/20回振・83.3%、前年7.6頭・74.0%）の各調査では発生量はほぼ平年並みであった。8月の圃場密度は高まらず、全般の発生量はほぼ平年並みで推移した。主な発生種はホソハリカメムシ、アカスジカスミカメであった。	発生要因として、昨年の発生量は平年並みで、越冬量も平年並みであったと推察される。しかし、7月下旬から8月上旬まで降水量が多く、気温も低く経過したため、カメムシ類の圃場での増殖は抑制されたと考えられる。	発生に応じて穂揃い・乳熟期～糊熟期に薬剤散布が行われた。
	イネミズゾウムシ	やや遅い	平年並	予察灯における越冬世代成虫の初誘殺は、平年に比べてやや遅い5月第2半旬に認められたが、総誘殺数は平年並みであった。5月下旬の巡回調査では、発生圃場率、被害株率ともに平年並みであった。	越冬量の減少と本田初期害虫との同時防除で近年発生が抑制傾向にある。	育苗箱施薬が行われた。多発田では本田防除が行われた。
	コブノメイガ	—	少ない	予察灯での飛来量は平年に比べて少なく、次世代の発蛾盛期は明らかではなかった。白変葉の発生は海岸部の一部圃場で散見されたが、全般に少なかった。	平成19年以降、飛来量が少なく、被害発生が少ない状況が続いている。	—
ムギ	さび病	—	やや少ない	オオムギでは5月中旬に発生が確認されたが、発病程度は低く、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	—	本病を対象とした防除は特に行われなかった。
	赤かび病	—	少ない	発病程度は低く、平年に比べて発生量は少なかった。	—	オオムギでは例年より10日程散布時期を遅らせ、穂揃い期10日後とさらにその10日後に薬剤防除が行われた。
	うどんこ病	—	やや少ない	オオムギでは4月下旬に発生が認められた。病勢は緩慢で、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	近年発生が少ないことから、伝染源量が少ないものと考えられる。	他の病害との同時防除が行われた。
ダイズ	ハスモンヨトウ	やや遅い	少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬までほぼ平年並みであった。その後、累積誘殺数は9月末には平年の5割程度になった。圃場での幼虫の発生は8月第4半旬からみられ、1a当たりの白変葉箇所は9月末には0.2箇所であり、平年（2.5箇所）より少ない発生であった。	成虫の飛来量がやや少なかったため、幼虫の発生量は少なくなったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	圃場での発生はほぼ平年並みであった。発生の主体はダイズアブラムシであった。	—	—
	吸汁性カメムシ類	平年並	平年並	圃場での発生はほぼ平年並みであった。	—	集団転作圃場以外では防除はほとんど行われなかった。
ナシ	黒斑病	平年並	平年並	初発は4月24日で平年並みであった。全般の発生量は平年並みであった。	—	袋かけ時期を中心に薬剤散布がよく行われた。以後、収穫期まで薬剤散布が行われた。
	黒星病	やや早い	やや多い	初発は4月28日で平年と比べてやや早かった。全般の発生量は平年と比べてやや多かった。	近年、発生量がやや多い傾向が続いているため、越冬菌量の増加により、全般の発生量がやや多くなったものと考えられる。	開花期から袋かけ期を中心に薬剤防除が行われた。
	ハダニ類	平年並	平年並	4月下旬の花叢への寄生率は平年並みであったが、その後発生は少なくなった。全般の発生量は平年並みとなった。	カンザワハダニの越冬量はやや少なかったが、4月下旬にクワオオハダニの花叢への寄生がみられ平年並みとなった。その後、5月、6月はやや少なくなると推移したが、7月および8月下旬には降雨が多く、薬剤散布が遅れ、密度が平年並みになったものと考えられる。	5月下旬～6月、7月上旬、8月上旬中旬を中心に薬剤散布が行われた。
	モモシンクイガ	やや早い	やや多い	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期は平年並み、誘殺数はやや多かった。果実の被害は全般には平年並みであった。	前年の発生がやや多く、越冬世代成虫の発生量がやや多かったと考えられる。また、4月の気温はやや高く発生時期はやや早くなった。発生量はやや多かったが、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなった。	ナシヒメシンクイ、ハマキムシ類との同時防除が行われた。

	ナシヒメシンクイ	平年並	やや多い	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期は平年並みで、誘殺数はやや多かった。果実の被害は全般には平年並みであったが、一部被害の多い圃場がみられた。	3月中下旬、4月は気温が高かったが、越冬世代成虫の発生時期は平年並みであった。越冬量がやや多かったことから、各世代の発生量はやや多くなったものと思われる。しかし、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなったと考えられる。	小袋掛け前に他害虫との同時防除が行われた。
	アブラムシ類	平年並	やや少ない	4月下旬の寄生梢率、寄生程度は平年並み、5月下旬には寄生新梢率、寄生程度ともやや少なかった。全般の発生量はやや少なかった。	4月中旬の気温がやや高く経過したが、発生時期は平年並みであった。その後、降雨等の影響により発生がやや少なくなると考えられる。	5～6月に薬剤散布が行われた。
	ハマキムシ類	平年並	やや少ない	フェロモントラップでのチャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代で、平年並みであった。チャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや少なく、幼虫による被害もやや少なかった。	4月上旬の気温はやや低かったが、越冬世代の発生時期は平年並みであった。5月、6月の気温はやや低く推移し、第1世代以降の発生もやや遅く、発生量も少なくなった。	他害虫との同時防除が行われた。
	カメムシ類	平年並	やや少ない	フェロモントラップでは5月1日に、予察灯では5月5日から誘殺された。その後、誘殺数はやや少なく推移した。予察灯では9月上旬から9月中旬にかけて誘殺数の増加が認められたが誘殺数はやや少なかった。有袋栽培が中心であり、被害果実は認められなかった。	昨年はヒノキ毬果が平年並みでカメムシの越冬量も平年並みと考えられた。本年はヒノキの花粉飛散量から毬果はやや多いと考えられ、圃場への飛来はやや少ないと予測された。カメムシ類に対する防除を8月下旬に行ったため圃場での被害はほとんど認められなかった。	他害虫との同時防除が行われた。
	クワカクイラムシ	—	少ない	全般の発生量は少なかった。	—	防虫果袋が使用された。
カキ	炭疽病	平年並	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	—	一部に無防除園や薬剤散布の遅れた園が見られた。
	うどんこ病	平年並	多い	6月下旬に初発を確認した。発生量は、6月下旬までは平年並みであったが、7月下旬以降増加した。8月、9月においても病勢は衰えず、全般の発生量は、平年に比べて多かった。	6月中旬まで降水量が少なく推移したが、6月下旬から7月下旬まで降水量が多く、発病が助長されたと考えられた。また、8月の気温が低く推移したによって、病勢が衰えず、さらに発生量が増加したものと考えられる。	長雨によって、薬剤散布の回数の少ない園や散布が遅れた園が多くみられた。
	カキノヘタムシガ	平年並	平年並	果実の被害は一部で多発生圃場が認められたが、全般の発生量は平年並みであった。	防除効果の高い薬剤が適期に散布されたためと考えられる。	各世代発生期に薬剤散布が行われた。
	ハマキムシ類	平年並	やや少ない	フェロモントラップでのチャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代で、平年並みであった。チャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや少なく、幼虫による被害もやや少なかった。	4月上旬の気温はやや低かったが、越冬世代の発生時期は平年並みであった。5月、6月の気温はやや低く推移し、第1世代以降の発生もやや遅く、発生量も少なくなった。	他害虫との同時防除が行われた。
	カキクダザミウマ	平年並	平年並	5月8日に被害捲葉の発生を認めた。発生量は平年並みであった。第1世代成虫は6月第2半旬から粘着トラップに誘殺され、誘殺数は平年並みであった。果実被害は7月中旬からみられたが、被害量はやや少なかった。	越冬成虫の飛来量が平年並みであったこと、成虫飛来時期の薬剤散布と被害捲葉の除去などの防除対策により、果実被害の発生量はやや少なかったと考えられる。	越冬成虫飛来期の薬剤散布と捲葉の切除が行われた。
	カメムシ類	平年並	やや少ない	フェロモントラップでは5月1日に、予察灯では5月5日から誘殺された。その後、誘殺数はやや少なく推移した。予察灯では9月上旬から9月中旬にかけて誘殺数の増加が認められたが誘殺数はやや少なかった。被害果実は8月下旬から認められ、平年に比べて少なかった。	昨年はヒノキ毬果が平年並みでカメムシの越冬量も平年並みと考えられた。本年はヒノキの花粉飛散量から毬果はやや多いと考えられ、圃場への飛来はやや少ないと予測された。カメムシ類に対する防除を8月下旬に行ったため圃場での被害はほとんど認められなかった。	8月下旬に薬剤による防除が行われた。
	夏秋キャベツ	黒腐病	—	少ない	巡回調査地点での発生量は生育期間全般を通じて少なかった。	栽培期間中の台風害等による葉の傷害がなく、感染機会が少なかったものと考えられる。
	菌核病	—	やや少ない	9月下旬には発生が認められたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	結球期に降雨が少なく、感染がやや抑制されたものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	発生量は全般に平年並みであった。発生の主体はモモアカアブラムシとニセダイコンアブラムシであった。	—	定植時に粒剤施用が行われた。

	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬までほぼ平年並みであった。その後、累積誘殺数は9月末には平年の5割程度になった。圃場での幼虫の発生は9月中旬からみられた。全般の発生量はやや少なかった。	成虫の飛来量がやや少なかったため、幼虫の発生量はやや少なくなったものと考えられる。	定植時の粒剤施用と、その後は発生に応じて薬剤散布が行われた。
	コナガ	—	平年並	幼虫の発生量は全般に平年並みであった。	—	定植時の粒剤施用と、その後は他のチョウ目害虫との同時防除が行われた。
冬キャベツ	黒腐病	—	やや少ない	発生圃場は僅かで、発病程度もやや低く、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	近年発生量がやや少ない〜少ないことから、伝染源量が減少し、発生が抑制傾向にあるものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	菌核病	—	平年並	一部で発病程度の高い圃場もみられたが、全般の発生量は平年並みであった。	—	薬剤による防除が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	アブラムシ類の発生量は全般に平年並みであった。発生の主体はモモアカアブラムシとニセダイコンアブラムシであった。	—	定植時に粒剤施用が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬まで平年並みであった。その後、累積誘殺数は9月末には東部、西部とも平年の5割程度になった。圃場での幼虫の発生は9月下旬頃からみられ、全般にはやや少ない発生であった。	成虫の飛来量がやや少なかったため、幼虫の発生量はやや少なくなったものと考えられる。	定植時の粒剤施用と、その後は発生に応じて薬剤散布が行われた。
	コナガ	—	平年並	幼虫の発生量は全般に平年並みであった。	—	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
タマネギ	白色疫病	—	やや多い	3月下旬には県下各地で発生がみられ、発病程度の高い圃場も散見された。盛期の発生量は平年に比べてやや多くなったが、4月中旬以降、気温の上昇に伴い、例年並みに病勢は鈍化、終息に向かった。	—	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	べと病	—	平年並	3月下旬における越冬罹病株の発生量は6.8株/1万株（平年1.0株/1万株）と過去10年で最も高くなった。その後、病勢は鈍化し、二次感染株の発生量は平年並みとなった。	越冬罹病株の抜き取りや薬剤散布が効果的に実施され、二次感染が抑制されたものと推察された。	4月2日付けで注意報を発表し、越冬罹病株の抜き取りと的確な薬剤散布を促した。発生地では二次感染防止のための薬剤散布が行われた。
	さび病	—	平年並	収穫期に発生がみられた。全般の発生量は平年並みであった。	—	本病を対象とした薬剤散布は行われなかった。
イチゴ	灰色かび病	—	平年並	県内各地で発生が認められ、全般の発生量は平年並みであった。	—	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	促成、半促成栽培における発生量は全般に平年並みに推移した。	前年秋期のアブラムシ類有翅虫の飛来数はやや多く、冬季の気温も高めに推移したため、本種の発生には助長的であったが、本種に卓効の薬剤が使用されたため発生量は平年並みになったものと考えられる。	定植時とその後は発生に応じて薬剤散布が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬まで平年並みであった。その後、累積誘殺数は9月末には東部、西部とも平年の5割程度になった。圃場での幼虫の発生は9月下旬頃からみられ、全般にはやや少ない発生であった。	成虫の飛来量がやや少なかったため、幼虫の発生量はやや少なくなったものと考えられる。	定植時の粒剤施用と、その後は発生に応じて薬剤散布が行われた。
キク	アブラムシ類	—	平年並	発生量は全般に平年並みであった。発生の主体はワタアブラムシであった。	—	定植時に粒剤施用が行われ、その後は発生に応じて薬剤散布された。